

氏名（生年月日）	サ トウ ヨウ スケ 佐藤陽祐（1982年4月26日）
学位の種類	博士（哲学）
学位記番号	文博甲第105号
学位授与の日付	2016年3月18日
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項
学位論文題目	A.N.ホワイトヘッドの哲学における「命題」概念の研究 —知覚論への「命題」概念の適用について—
論文審査委員	主査 中村 昇 副査 須田 朗・田中 裕（上智大学）

内容の要旨及び審査の結果の要旨

I. 本論文の構成

序論—問題意識の概要と本論文の主題

第1章 命題

- 1-1 命題—先行研究における命題概念の理解について
- 1-2 知覚的感受における命題について
- 1-3 現象と実在のはざまから
- 1-4 想像的感受における命題について—実在しないものたちの経験

第2章 命題にもとづく知覚論

- 2-1 「理論負荷性」という概念における「理論」について
- 2-2 知覚のための手がかり—理論としての命題
- 2-3 命題にもとづく知覚論と理論負荷性
- 2-4 抽象化されたものとしての知覚

第3章 二つの知覚論の関係性について—命題にもとづく知覚論と象徴的関連付け

- 3-1 二つの知覚様態—因果的効果と現前的直接性
- 3-2 象徴的関連付け
- 3-3 二つの知覚論の共通点
- 3-4 二つの知覚論の相違点
- 3-5 二つの知覚論の関係性について

第4章 二つの知覚論の統合的解釈に向けて

- 4-1 同時的世界について
- 4-2 緊張の場所と象徴的関連付け

4-3 緊張の場所と命題

4-4 意識的知覚について

結論にかえて一残された課題

II. 本論文の意義

哲学・論理学における「命題」という概念は、アリストテレス以来、「真偽の確定が可能な文」というものである。外界（言語的世界以外の世界）の事実を正確に表していれば真であり、そうでなければ偽であるというわけだ。したがって、疑問文や感嘆文などは、命題ではない。この「命題」という概念は、19世紀末から20世紀にかけて、フレーゲやラッセル、ホワイトヘッドなどによる論理学における革命（記号論理学の成立）において、大変重要な役割を演じる。記号論理学の一部をなす命題論理においては、変項（数学における変数）は、従来の語（項）ではなく、命題になった。つまり、命題そのものが、数学における X のようなものになり、どのような命題でも変項としてあつかうことが可能になった。このことにより、論理学の領域が一気に拡大され、さらに量子化（ \forall , \exists ）が付加された述語論理により、現在の記号論理学（数学基礎論）がほぼ完成する。この記号論理学の成立に決定的な役割を果たしたのが、『プリンキピア・マテマティカ』（1910-13）という大著であり、それをバートランド・ラッセルと共に著したのが、ホワイトヘッドなのである。このように記号論理学における「命題」概念を十分に知り尽くしたホワイトヘッドが、還暦を越えイギリスからアメリカにわたり、20世紀の形而上学に独自の高峰として聳える『過程と実在』という著作を書く。そして、そのなかで、とてつもなく異様な「命題」概念を提出した。その概念が、本論文の対象とするテーマである。その「異様さ」は、『過程と実在』刊行以来、ほぼ100年経った今でも、研究者の間で、その明確な概念規定が共有されていないことからでもわかる。それだけではない。「命題」概念にかんする論文や著作も数えるほどしかなく、しかも、その内容は、『過程と実在』におけるこの概念の役割を正面から論じたものではない。無論、この「命題」概念は、記号論理学における、わかりやすい「命題」とは、その語が同じというだけで、何ら共通点はない。

本論文は、そのような「命題」という概念を、『過程と実在』という著作のなかで位置づけようとするたいへん野心的な試みである。さらに、「命題」を、「象徴的関連付け」という知覚についての本質的構造と対比させ、「命題」にもとづくもう一つの知覚論を提示し、最終的に、この二つの知覚論を統一しようとしている。このような観点からすれば、本論文は、その企図も内容も、十分に独創的で比類のないものである。

Ⅲ. 本論文の概要

第1章においては、「命題」概念が、まず説明される。ホワイトヘッドの世界観は、この世界を構成するすべての存在を「現実存在」(actual entity, 本論文では、「現実的実質」と訳している)と表現する。この「現実存在」は、この宇宙に存在しているすべてのものをあらわしているのであり、素粒子から細胞、動植物から鉱物、建築物、ピラミッド、砂塵、液体、気体まで、そのスケールも内容も、ありとあらゆるものことである。さらに、観念的なもの(そのときどきの考えや気分)のようなものまでも包摂している。このような唯一無二の「現実存在」を規定するのが、「永遠的客體」(eternal object)である。この「永遠的客體」により、「現実存在」が、ある程度規定されていくと言える。つまり、唯一無二のものでありながら、他のものとも共通の要素をもつことができるのである。言いかえれば、われわれが理解できるように、観念のレベルで分節化されるともいえるだろう。

そして、「命題」とは、このような「現実存在」と「永遠的客體」とが、混ざったものだホワイトヘッドはいう。たとえば、「中央大学は、八王子にある」という文は、〈中央大学〉や〈八王子〉(〈 〉は、言語化される前の〈そのもの〉)といった「現実存在」を、「中央大学」「八王子」といった「永遠的客體」と結びつけて表現しているというのである。つまり、「中央大学」「八王子」という語によって概念が成立することにより、「中央」「大学」「明星大学」「日野」「東京」「八」「王子」などといった他のさまざまな概念との関係性が、一気にそこに生まれることになる。そして、「中央大学は、八王子にある」という文が成立することによって、その否定「中央大学は、八王子にはない」もまた、その背景に含意される。われわれが、1つの文を想定するとき(「命題」が、われわれの思考や知覚において登場するとき)、その背後には、このように無数の影が付随していることになる。このようなありかたこそ、「命題」の基本的な性質である。このような「無数の影」のことをホワイトヘッドは、「半影」(penumbra)という。このような「半影」によって、「現実存在」は、その現実に埋没したあり方から、ある可能性の領域(「永遠的客體」の領域)に開かれる。われわれが「命題」を対象としてもつとき、われわれは、現実の世界から、それとは異なる領域に、おのずと一歩踏みだすことになるというわけである。したがって、「命題」は、「現実存在」と「永遠的客體」による「雑種」(hybrid)だと、ホワイトヘッドはいう。

第2章では、このような「命題」概念を、さらにべつの角度から説明していく。アメリカの夭折した哲学者ノーウッド・ラッセル・ハンソンが提唱した「理論負荷性」という概念と「命題」とを比較している。「理論負荷性」というのは、われわれが知覚の現場で、何かを見るとき、〈そのもの〉を見ているわけではなく、「何かとして」見ているというものである。13世紀の天文学者が見る太陽と、21世紀の天文学者が見る太陽とでは、異なる太陽を見ているというのである。それぞれの天文学者は、みずからがよってたつ理論をもつ。つまり、13世紀の天文学者であれば、プトレマイオスの天動説であり、21世紀であれば、地動説であり、一般相対性理論であろう。したがって、それぞれの天文学者は、みずからがもつ理論が負荷された状態で知覚しているというのである。最初から(知覚の段階から)、見ている「太陽」は、異なっているのだ。

このような「理論負荷性」における「理論」と、ホワイトヘッドの「命題」との共通点が指摘され、「命題」概念の「理論負荷」的側面が抽出される。ホワイトヘッドの知覚論（正確にいうと、「知覚論」をも、その部分にしている「抱握論」）では、最初に「物的感受」（〈そのもの〉をそのまま受けとる）があり、そのあとで「概念的感受」（〈そのもの〉に「永遠的客体」を導入する）がある。この「概念的感受」において、ハンソンのいう「理論負荷」がなされるというのだ。そしてその「理論」の役割は、まさに「命題」が果たしているのではないかというのである。このことにより、ホワイトヘッドの「命題」のあり方が、明確に説明されたといえるだろう。

第3章は、ホワイトヘッド本来の知覚論である「象徴的関連付け」（symbolic reference）について論じられる。この知覚論と「命題」にもとづく知覚論との比較をするためである。「象徴的関連付け」という知覚のあり方において、ホワイトヘッドは、二種類の知覚を前提している。「因果的効果」（causal efficacy）と「現前的直接性」（presentational immediacy）である。われわれは、無意識のうちで、過去から連綿と続いている身体的な知覚をまづもっているとホワイトヘッドはいう。それを「因果的効果」と名づけた。さらに、そのような「因果的効果」を基礎にして、われわれは、現時点での（いわば）知覚風景を手にしてしている。つまり、眼の前の世界を知覚しているのである。この現時点での知覚風景を「現前的直接性」とホワイトヘッドは呼ぶ。この二つの知覚様態が、現在の時点で結びつくことにより、われわれの知覚は成立する。この結びつき方を「象徴的関連付け」と名づけている。

さらに、この「象徴的関連付け」と「命題」による知覚の共通点、相違点が検討される。「因果的効果」による過去からの連続的な事実に対する、現時点での「現前的直接性」の関係が、無意識的な感覚と件に対する「命題」の関係と、同様の構造をもっていることが共通点として挙げられた。相違点としては、「象徴的関連付け」によれば、その知覚をとりまく他の「現実存在」との関係や、知覚主体である当の「現実存在」の空間・時間的關係が、説明可能であるのに対し、「命題」による知覚論では、そのような説明はできないという点であった。

第4章では、以上検討してきた二つの知覚論を統一的に解釈できるかどうか吟味される。知覚が成立する場所を「緊張の場所」（strain loci）とホワイトヘッドは呼ぶ。ある特定の「現実存在」（厳密にいうと、ホワイトヘッドの考える世界では、現時点で特定できる「現実存在」は、一つの慣性系の一つの「現実存在」だけである。その「現実存在」が、1つの「現実世界」をつくっている。そこからしか、世界は記述できない）が、幾何学的場所の中心地点となり、そこで他の「現実存在」との関係が生じるからだ。この「緊張の場所」を中心にして、線や点といった幾何学的概念も成立する。抽象的な幾何学的概念も、われわれの知覚をもとに、再構成しようとホワイトヘッドはしているのである。

このような場所において、「象徴的関連付け」と「命題」による知覚とが、どのように関係しているのかが検討される。その結果、「象徴的関連付け」における「意識」の発生に「命題」による知覚が、とても深くかかわっていることが判明した。そして最終的に、意識の発生においては、「命題」概念が、不可欠であることが解明される。つまり、「象徴的関連付け」と「命題」による知覚とは、

対立するものではなく、知覚における意識の発生の現場において、「命題」的感受というはたらきが必須であり、「命題」概念抜きでは、「意識」発生のプロセスが、うまく説明できないということが、はっきりしたのである。

IV. 本論文の評価

まずは、本論文の課題をいくつか指摘したい。

そもそも「象徴的関連付け」と「命題」による知覚論とを、異なる知覚論として比較検討できるのかどうか疑問である。ホワイトヘッドの宇宙論においては、すべての「現実存在」は、「抱握」(prehension)という関係性において説明される。知覚も思考も反応も、ありとあらゆる関係が、「抱握」というあり方によって解明される。そして、この「抱握」は、「感受」(feeling)とも呼ばれ、あらゆる関係が、その密度のちがいはあるにしろ、統一的に理解されることになる。ホワイトヘッド哲学のこのような基礎的な構成からするならば、「象徴的関連付け」と「命題」とを、本論文のように対立させて論じるのではなく、「抱握」理論の一部として、最初から関連させて統一的に論じることが可能ではなかったのか。これが、本論文の根幹の問題設定に対する疑問である。

さらに第2章において、ハンソンの「理論負荷性」と「命題」との比較検討についても、疑問が残る。そもそもハンソンは、「理論負荷性」という概念を提唱した著書(『知覚と発見』)において、感覚与件論者を完膚なきまでに論破した。われわれの知覚は、まず、感覚与件があって、その与件を、みずからもっている概念によって分節化するのではないというのだ。そうではなく、最初の知覚の現場で、すでに「理論」が入りこんでいるのであって、原初的段階から「～として見ている」(seeing as～)のである。しかし、ホワイトヘッドの「命題」概念は、最初に入ってくる「感覚与件」を命題化するのであって、「感覚与件」という所与がなければ、成立しない概念である。そうだとすれば、ハンソンの「理論負荷性」という考えと、「命題」とを比較するのは、そもそも不可能なのではないか。これも、本論文の課題である。

しかし、以上のような課題があるにせよ、「本論文の意義」においても述べたように、「命題」という概念は、1929年の『過程と実在』刊行以来、殆どの研究者にとって謎のままなのであり、この概念に正面から取り組むだけでも、かなり評価できる。しかも、ハンソンの「理論負荷性」という概念との比較や、「象徴的関連付け」との比較など、意欲的で斬新な角度から切りこんでいった点も充分評価に値する。また、そのことによって、「象徴的関連付け」「命題」「意識」といった概念が、有機的な関連をもって記述できることが判明した。世界で初めての「命題」概念に対する果敢な挑戦として、また、その挑戦が、ある程度の成功をおさめたということからして、本論文には、最大級の評価をしてもよい。

さらに第4章で、「命題」との関係でとりだして論じている「緊張」という概念もまた、ホワイトヘッド研究者の間では、最大の難物である。われわれが生きている空間の中心であり、また、同時に時間の発生の現場でもあるような概念であり、それは、それぞれの「現実存在」の核を、その都度なしている。そして、ここから、幾何学も発生していく。ひじょうに重要な概念であるにもかか

ならず、やはり難解すぎて、研究者間で定着した概念規定がまだ存在しない。この「緊張の場所」を、「命題」をあつかう本論文の最終章で論じ、さらにわれわれの知覚が発生する現場としての確に位置づけたことは、たいへん評価できる。しかも、「象徴的関連付け」という既成の知覚論とも密接に関連づけている。このことは、はかり知れない研究成果である。

以上の点より、博士学位を授与するのに充分値する論文であると評価する。